序章

……よう、人間ども。最低で最悪の、腐れた人間どもよう。

聞けよ――お前らが大好きで大好きでたまらない、化物の話だぜ。

お前らって化物の恋物語が好きだよな。誰からも受け入れられない化物が、たった一人の人間と出会って理解を得、紆余曲折（うよきょくせつ）の果て、燃えるような恋に落ちて結ばれる。そんな夢物語が大好きだよな。

ありゃすんげえいい話だよなあ。私でさえ夢中にするような、とんでもなくいい話だ。

そう、とんでもなく――都合のいい話だ。

だってお話の中の人間は、化物を裏切らないんだからよ。

いつだってハッピーエンド。どんな困難が立ちはだかってもハッピーエンド。どれもこれも、判で押したようなハッピー・ロマンスだ。ああ、都合がいい話だぜ。

だけどな、腐れ人間ども。

現実はそう上手く行かねえ。

現実はハッピーエンドなんかじゃ終わらねえ。少なくともこの私の話は、ハッピーとは程遠い。爽快感なんかねえ。カタルシスとも無縁。だって現実だからな。

……かと言ってバッドってわけでもねえぞ、そこを履き違えるなよ腐れ人間ども。
確かに物語みたく幸せじゃなかったけど――私は、これが最善の結末だと思ってんだ。
それがこの私の話の結末だ。私に相応しい最低な結末だ。
だけどこれは仕方ねえ――だって私たちはみんな、物語の登場人物みたいに『一生懸命』に生きていなかった。命なんか懸けなかった。誰も彼も、どこかで手を抜いていた。
どいつもこいつも――怠け者だった。
だからこんな結末になっちまう。
こんな――砂を噛むように味気ねえ、腐れた『最善』に、なっちまったんだ。
なあ腐れ人間どもよう、時間があるなら聞けよ。聞いてけよ。
だって今から始まるのは、この化物の――クソみたいな、ラブ・ストーリーだ。
……な、お前らが好きそうな話だろ？　はっは、反吐が出らあ。
出てくる奴はクソばっかだ。どいつもこいつも、くたばりやがれ。
特にあのクソ神父は百万回死ね。マジで。
そして私も、百万回死ね。死ねないけど。

第一章　怠け者どもの休日

今や世界でも大きい部類に入るバランチア王国の、王都バランチアから二つほど街を隔てたところにあるラクリマ。小洒落たカフェや決して安くないホテルから、学術書とポルノ雑誌を同列に並べる巨大な本屋や刀剣と呼べる物を扱う刃物店まで、かなり幅広い店を構えている、割合大きな街である。少し裏に入れば娼婦もよりどりみどりで立っている。若い美女から老けた醜女（しこめ）まで自由である。このラクリマに存在しないものと言えば殺人鬼と教会、それから『真面目な人間』くらいなものだ。その他は大体揃っている。軍の支部はないが、警察署があるので問題はない。

そしてそんなラクリマの中で一際目立つのは、小さな町程度なら飲み込めそうな敷地の真ん中に、ずんと王者のように聳え立つ四階建てのアイボリーと、円形に近いラクリマの外周部にひしめきあって存在する工場（こうじょうくん）群、そして毎日吐き出される汚い灰色の工場（こうじょう）霧（む）だ。

アイボリーの建物は横に長い直方体をいくつも並べた形をしていて、名前をラクリマ・スクールという。ジュニアハイからアカデミーまでを統合した、持ち上がり式の学校だ。バランチア王国でてっとり早く学歴を得ようと思えば、このスクールに通うのが早い。もっとも、質は保証できないが。何せこの街に真面目な人間など一人としていない。

スクールらしく中央を陣取って、その直方体は街全体を睥睨（へいげい）している。すっかり街の象徴めいて、その気取りきったペダンチック・アイボリーは人間を見下していた。因みにこのスクールの東が所謂『裏』で、西が『表』である。警察署も西にあるし、区画整理が終わっているのも西だ。乗合馬車も西側を重点的に通る。

そのスクールから東西南北へ十字に伸びている大通りの西道。

警察署から徒歩で十分。スクールからは十五分。

そこにそのカフェはあった。

人々を突き刺す日差しも緩やかになり始めた晩夏の、昼時である。

スクールに近い大通りに店を構えているにも関わらず、なぜかそのカフェ・テリアにはたったの一組しか客がいなかった。しかも通りからよく見えるテラス席ではなく、奥まった隅の方に一組、である。

喧騒（けんそう）とは少しばかり距離を取った角の席、さして広いとは言えない店内で、オレンジ色の照明に照らされた小さな茶の四角いテーブル。そこに、唯一の客である一人の少女と二人の男が座っていた。

カフェのウェイトレス全員に、注目されながら。

ある者は隠しもせず身を乗り出し、ある者は遠慮（えんりょ）がちに横目で。いくら学生の勤務者が多いとはいえ、接客業の人間にあるまじき醜態（しゅうたい）である。だが、彼らを責める気はまるで起こらない。

それほどまでにその三人は目立っていたのである。

性別や年齢だけなら、どうということもない三人組だ。十七、八の小柄な少女に、二十代前半と見られる

長身の青年が二人、普通なら、ただの友人関係で片づけられる。特にこの辺りにはスクールがあるため、彼らくらいの年代の若者が複数で歓談する光景はよく見られる。もっとも客の殆どはスクール脇に店を出している屋台に流れて、このカフェにはやってこないのだが。

しかし、この三人組は明らかにそうではなかった。

少女はまだいい。短く切った肩までの黒髪に、くたびれた黒いパンツスーツ。学生の私服というには少々渋いが、無理を押し通せばまだ学生と言えなくもない。だが同席する男二人は、もはやそんなことを吹聴すれば正気を疑われかねないほど、学生とは程遠かった。

一人は腰までの長い黒髪と黒い神父服で、もう一人の男は首が隠れる長さの茶髪と赤の将校用軍服。宗教に対しての造詣が薄いこのバランチアでは、宗教かぶれでも今日び神父服など着ないし、重度の軍事マニアでも、逮捕されるのが嫌で、将校の軍服を着て歩いたりしない。そしてさらに言えばこの街に教会などないし、神父と仲のいい軍人など聞いたこともない。そもそも、軍服の男の髪は軍人として長すぎる上、遠目でもわかるほど明らかに染めていた。髪の毛を長く伸ばし、さらに染めるなど、それが軍紀に違反しているであろうことは一般人にすら予想がつく。

ハムとマヨネーズを抜いたハムサンドを一心不乱に頬張る、よれよれのスーツの少女。

黙々と夕刊に目を通していく、存在しないはずの神父。

万年筆を片手に書類と向き合って唸る、軍人に見えない軍人。

見るなという方がおかしいと感じるほど、奇妙な取り合わせの三人であった。

しかも、少女の容貌は神に仕える天使かと見紛うほどに可憐で、神父服の男の造作は神に捧げる彫像のように整っている。軍服の男も、顔こそ凡庸だが、一般人より頭一つ分ほど高い身の丈で、非常に目を引く。

お洒落と同じくらいにゴシップの好きな若いウェイトレスたちが、仕事そっちのけで見るのも無理のないことではあった。その上この三人、ここ最近ずっとこのカフェに入り浸っているのである。かれこれ三か月以上、毎日同じ面子でぞろぞろと、日が暮れるまで黙って座っているだけなのだ。少女はサンドイッチを食べ終わると眠る。背もたれに体重を預けて、まるで天使のような寝顔で眠るのだ。邪推しない方が無理と言うものである。人生の娯楽が少ないウェイトレスたちにとってはなおさらだった。

だが、当の三人は注目されていることに気付いているのかいないのか、各々の手をまったく休めない。少女は飢えた獣のように山盛りのサンドイッチを食べていたし、神父服の男はつまらなさそうに今朝の新聞を読み、軍服の男は今にも倒れそうな顔色で書類に万年筆を走らせていた。

しばらくすると、満腹になったのだろう、最後のサンドイッチをカフェ・ラテで流し込んだ少女が、口を拭きながら憂鬱そうな顔で「なあ」と軍人に話しかけた。これはこの三か月で初めての変化だった。ウェイトレスがざわめき、客がいないことをいいことに押し合いへし合い三人を見つめる。羨望を通り越して感嘆すら覚えるその少女の声は、まさしく鈴が鳴るような声だった。天使の福音と呼んでも差支えがないだろう。

その口調を除けば。

「ちょい手ェ止めてくれね？」

少女の口調はまるで、ストリートの少年のものだった。ウェイトレスが総じて目を丸くするほど声に似つ

かわしくない、乱雑なスラング混じりで、彼女は男に話しかけた。
「なーに、アウルちゃん」
話しかけられたはずの男は、顔も上げずに応答し、そのまま書類の上に手を滑らせていく。言われたことはまったく気にしていないようだった。感情のこもっていない男の返事を聞いて、アウルと呼ばれた少女は、その端正な顔に渋面を広げる。
「いい加減、仕事くれよ。三か月も待ってんだぜ、そろそろあんだろ？」
その言葉に、ようやく男の手がピタリと止まる。少女にどう返事をしたものか、逡巡したようだった。だが、書類の上にインクの染みが出来そうになる直前で、男は再び手を動かし始めた。
「渡したいのは山々なんだけどなあ。ないものは渡せねえんだなあコレが……」
疲れ果てた声で、笑いすら滲ませながら男は少女に言葉を返す。
その答えが不満だったのだろう、少女は唇を尖らせて「そんなにないのかよ」と男をなじった。なじられた男はとうとう筆を止め、隈の出来た顔で少女を睨みつける。
「そんなにねえんだよ。最近は『悪人』どもも手慣れたもんで、尻尾をなかなか出しやしねえんだ。ていうか今そんなこと言われて対応できるわけねえだろ、俺がこんだけデスクワークしてんだぞ、昼飯食う暇もなくやってんだぞ、ちっとは察しろよぉ！」
最後の方などもはや泣きそうな声で叫び、とうとう書類の海に男は突っ伏した。
「俺の権限なんてそんなにねーのによ、あのボンクラ王子は俺に全部回してくるし！　俺の階級中尉よ？

下から数えた方が早いくらいの階級よ？　しかも俺には爵位すらないんだぞ‼　なんか権限あると思ってんの？　なんで俺がこんな……こんな……申告書だとか予算案だとかなんか色々書かなきゃならんの？　これってあいつの仕事じゃね？　俺の仕事ってどっちかってーとお前らの指揮とか、そういう表舞台系の仕事だろ？　つか大体、俺が書いたら書いたで『字が汚い』とか『こんなもので通ると思ってるのか愚図め』って文句言うくせにあのボンボン野郎！　俺はこんなとこまで来てお前らのお守りもしてんだぞ！　あいつもこっち来て警察との軋轢で苦労してみりゃいいんだよおおおお‼」

ベキィッ！と興奮のあまり木製の万年筆をへし折った軍服の男に、少女は顔をひきつらせて『こ、ごめん……』と謝罪の言葉を述べる。

「で、でも、このままじゃけっこうジリ貧なのも確かなんだよ、な、ヘイズ！」

急に話を振られた神父服の男は、新聞から顔を上げて、迷惑そうな表情で少女を見た。

「……なぜ俺に話を振る」

「いや、だって、お前も私と一緒じゃん？　だからさ」

えへへ、と愛想笑いを浮かべる少女に、神父服の男は新聞を畳んでからため息交じりに言い放った。低い、腹に溜まる声だった。神の雷霆のような声である。喋り方も美しいキングズだ。あまりに美しいため、神父と呼ぶには些か優しさや慈しみが欠けている。しかし、その彫像のような冷たい容貌にはよく似合っていた。

「いいか、アウル。俺はお前と違って無駄なことに金を使う趣味はない。だから貯蓄もあるし、毎月の給料だけでやっていける。一緒にするな」

その言い草には少女もさすがにカチンときたのか、ガタン！という大きな音とともに立ち上がる。
「わ、私はナイフの手入れしなきゃいけないんだから仕方ないだろ⁉　そりゃお前は体一つで突貫できるからいいけどさあ！」
「お前の『買い揃える』は収集と同義だろうが。しかも遠距離は俺がいるのだから必要ないはずだ。それともお前は俺が信用できないのか」
「そうは言ってないだ――」
「あ、そこのおねーさんコーヒーおかわり一つ」
口論する二人を止める意味合いもあったのだろう、軍人の男は大きめの声でウェイトレスを呼び止めた。
その声に、少女は渋い顔をしたまま椅子を元に戻し、席についた。
「つーかアウルちゃんいい加減ナイフとかそういう前時代的な戦い方やめたら？　普通に銃とか使えばいいじゃん」
「あー、だめだめ。銃はあれだ――手加減できねえからな」
あと火薬は臭いからやだ、とまた渋面を作り、少女は背もたれに体重をかける。
「それにナイフ好きなんだよ」
「……変なやつだよなあ、お前ら」
「変なやつじゃなかったらこんな仕事してねえよ」
畏怖するような声音の男に、にやり、と少女が意味深に笑った。

それからまた、三人の間には沈黙が下りた。そして日が暮れるまで、結局一片も会話はなかった。

◆

「あームカつくなー！　不景気！　不景気最悪！　欲しいナイフ一つ買えない世の中なんてクソ食らえ！　オレンジ一つ買えない世間なんてぶっ潰せ！　豚に食わせろ！」

「言葉遣いを直せと何度言ったらわかるんだ、お前は」

石畳に落ちた小石を蹴り飛ばして、アウルはそんなことを叫びながら夜道を歩いていた。ラクリマの東側に至る道である。人通りは他にはない。スラングたっぷりのその言葉の群れを、ヘイズと呼ばれていた神父服の男が苛立たしげな声で叱責した。ガス灯が道を照らしていた。工業霧に呑まれて、今日も月はない。

毎日毎日よくもおんなじ注意ができるよなあ、などと思いながら、アウルは唇を尖らせる。まだこの男とは一年ほどしかいないが、その一年の記憶の中で注意をされていない日がない。この男があまりにうるさいので、ついに半年前、一人称がキングズの発音になった。元々アウルは市井どころか、辺境の村の産まれである。下劣に訛っていて当然なのだが、それがこの『王族訛り』にはわからないらしい。この男のことは実際嫌いではないし、同僚としては心強いが、少し鬱陶しい。

「へーへー。じゃあ直すからなんか奢って」

「もうどこも閉まっているだろう。酒は奢らんぞ、お前の酒癖は悪すぎる」